特集

防災を多様な視点で考えよう

―地域に暮らす多様な人々の命とくらしを守るため―

東日本大震災から間もなく7年となるが、首都直下型地震や南海トラフ地震の発生が心配される昨今。防災について考え、万一に備えておくことが差し迫った課題だ。

今回は、阪神・淡路大震災に際して国際協力NGOの現地スタッフとして復興支援に従事し、その後、東日本大震災女性支援ネットワークの立ち上げに参加した浅野幸子氏(減災と男女共同参画 研修推進センター)にお話をうかがった。

Profile 浅野 幸子 (SACHIKO ASANO)
減災と男女共同参画 研修推進センター
早稲田大学「地域社会と危機管理研究所」招聘研究員

阪神・淡路大震災に際して学生ボランティアから国際協力NGOのスタッフとなり、在宅避難者・仮設住宅・全焼地域の復興まちづくり協議会の支援などに4年間従事。その後、(財)消費生活研究所、全国地域婦人団体連絡協議会でそれぞれ事務局員・研究員として勤める。この間、働きながら法政大学大学院修士課程修了(政策科学修士)。2011年6月に発足した東日本大震災女性支援ネットワークの活動に参加。2014年4月より、後継団体である、減災と男女共同参画 研修推進センターの共同代表。

男女共同参画の視点から見た現状と課題

大規模災害のたびに問題となってきたのが避難所生活だ。実際どのような問題が起きているのだろうか。

おもなところでは、「救援物資が届かない」「プライバシーが保たれない」「衛生状態や治安が悪化する」などの問題が生じている。

一口に不足物資と言っても、食料から育児・介護用品、女性の衛生用品・下着、医薬品と多岐にわたる。たとえば、替えオムツは、乳児にも被介護者にも必要だし、哺乳瓶と消毒剤なども不可欠だ。女性の下着も替えが無い、洗濯ができない、婦人科系の病気を引き起こすこともある。

避難所で重度の身体障害者が、薄い敷物だけの床に何日も寝かされていたり、また、乳児を抱えたお母さんが、替えオムツがないことを誰にも相談できずに悶々としていたことも。

プライバシーに関しては、避難所では個人スペースを確保することが必須だ。床にブルーシートを敷いただけで通路もないと、周囲との接触などからストレスも大きくなる。自治体によってはカーテン式の間仕切りなどが設置されることもある。

授乳や着替えなどのために、女性専用の部屋がないと困るし、感染症などの人も一部屋が必要だろう。

また、避難所にとどまれない人が車内で寝泊まりするケースが熊本地震の際に度々報道された。確かに車の中は私的空間を確保できるが、長時間無理な姿勢で居続けることで血中濃度が高まり血栓ができるエコノミークラス症候群の危険性が高まる。今後はリスク周知がさらに必要となるだろう。

被災者の健康や命を左右するトイレ問題は最重要事項だ。場所によっては男女別すらないこともあるというが、避難所のトイレ数は男性用と女性用が1対3というのが国際的人道支援の基準だ。慣れないトイレに行くのを我慢しようとして、食事や水分補給を控えていると脱水症状やエコノミークラス症候群を引き起こす事態となることも少なくない。

これら現状のおもな問題を見ると、避難所生活では高齢者、乳幼児を抱えた母親、障害者など弱者がより困難にさらされることが分かる。

性別や立場によって困難が異なるので、それらを把握し、ニーズに応えるにはきめ細かい配慮が欠かせない。それ故、避難所生活改善のためには対策検討の段階から、弱者の目線で対応できる女性の視点が入ることが必須となる。「避難所生活では、平常時の困難や性別役割が表面化し、拡大するので、日頃から地域での関係を大切にし、自らの困難を告げられるようにしておくことも必要です」と浅野氏も勧める。

多様な視点から考える防災

〈自分でできること〉

もしも大地震が平日の昼間に起きたら、地域に残っているのは主に高齢者、女性、子どもということになるだろう。そんな場合に備えて女性ができることを挙げてみよう。

①まずは室内の安全化を徹底してほしい。部屋のレイアウトを工夫し、被災しても被害を最小限にとどめたい。たとえば寝室には背の高い家具は置かず、もし置く場合には転倒防止器具で留める。日頃から、非常用持ち出し袋や薬などを手元に用意しておくのはもちろん、ガラスの破片などが散乱した中を歩くことを想定して底の厚い靴や、停電時に自動で灯るライトなども備えておきたい。

勤務先で被災することを考えれば、会社のロッカーには運動靴を置き、大切なものやカロリー補給食などを常時バッグに入れておくとよい。

②食料備蓄も欠かせない。避難所でさえ十分ではないので、在宅避難者にまで支援がくることは稀だ。最低でも3日分、基本的には1週間分の食料・水の備蓄を勧めたい。防災食だけでなく、日持ちする食品を多めに購入しておき、日常的に食べながら補充していくローリングストックのやり方がオススメだ。なお、備蓄するのは非常食でなく、日頃食べ慣れた物のほうが非常時のストレスも軽減できるという。

③災害用トイレの備え。いろいろな場合を想定し、家庭でも簡易トイレ、大きめのビニール袋、新聞紙などを備えておきたい。

④家族間の安否確認の方法も話し合っておきたい。災害時には電話が繋がりにくくなるので、災害時伝言ダイヤルの利用のほかにも、遠方の親戚などに家族がそれぞれ安否を伝えておくなどの方法もある。

まずは自分で備えることから始めよう

種　類	品　物
女性用品	生理用品・防犯ブザー・化粧水・下着など
乳幼児用品	粉ミルク・飲料水・哺乳瓶と消毒剤・ベビーフード・紙オムツ・着替えなど
介護用品	紙オムツ・器やスプーン・介護食・シートなど

〈地域と共同で進めたいこと〉

まずは居住地の被災時システムを知っておこう。

(西東京市では、災害メール、要援護者の登録管理システムが稼動しています。西東京市サイトを参照してください)

地域の防災訓練などに参加し、あらかじめネットワークを作っておくのも有効だろう。

また、行政とは別に、地域での繋がりも大事だ。ママ友、PTA、隣近所、趣味のサークル、行きつけの店など、日頃から互いの存在を気にかける関係を作っておくことが望ましい。

自主防災組織の体制としては、リーダー層に、最低でも3割の女性を必ず入れ、高齢者・障害者・子ども・女性の視点に立った対策が検討できるようにしたい。もちろん、女性といっても、子育て世代・福祉関係者・子育て終了世代など、年齢や経験が異なるほうが視点の間口が広がってよい。

こうした組織がさらに地域のほかの団体と連携することも必要だ。

東北のある自治体では、発達障害の子どもを持つ母親のグループや助産師のグループ、アレルギーの子どもを持つ親のグループなど、日頃別々の活動をする団体が防災グループを立ち上げ、学習しながらネットワークの強化を図っている。参考にしたい取組である。

地域でのコミュニケーションも大切です

●隣近所への声がけ・安否確認
●要援護者(乳幼児・妊産婦・高齢者・障害者・外国人・観光客など)の安否確認・避難支援

避難所運営での注意点

阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震などの経験から、避難所運営のポイントが次第に明らかになってきている。浅野氏から参考にとご提供いただいた資料より、避難所運営について整理してみた。

〈女性の視点と参画が必要なワケ〉

◆地域の少数の男性役員が責任を一手に引き受けるものの、女性や乳幼児、要介護者関連の困りごとや必要な物資に気づけない、わからない。休めないので、疲労がたまる。

◆女性たちは、不十分な生活環境での育児・介護の困難に直面するが、避難所運営などの意思決定に参画できないので、要望が届かない。

◆高齢者、障害者、慢性疾患の人などの意見を聞き取る体制が整っていない。

こうした状況の中で避難者たちは次のような問題を抱えている。

避難所生活で必要な配慮や環境は男女で異なるが、「着替えの部屋がない」「生理用品が不足している」「性犯罪の被害に遭う」など、プライバシー・衛生・安全面で特に女性の環境は厳しいものとなる。

また、「ノロウイルスや食中毒が心配」「食物アレルギーの子どもは避難所の食事を食べられない」「離乳食やとろみ食、低塩分食がない」など、衛生や栄養の面でも問題がある。

これらさまざまな問題が生じても、当事者は意見も言えず、相談できる人もいないのが現実である。

こうした場面を踏まえると、やはり避難所運営には女性の視点と参画が欠かせない。従来のように意思決定が男性に偏る場では、避難者に我慢が強いられることが多かったが、皆が安心して過ごせる避難所であるためには、「我慢」から「安心」へのパラダイムシフトが求められる。そのために、次のような点を改善していきたい。

◆責任者やリーダーには男性女性の両方を配置する。

◆運営上、役割班を作る場合も、特別なケース以外は、構成員の性別が偏らないようにする。

◆女性や子ども、高齢者や障害者など弱者のニーズが把握できるよう、会議には多様な立場の代表を配置。

◆在宅避難者にも物資の配分をできるシステムを作る。

実際に避難所運営に複数の女性が参加することで避難所生活が改善された例があるので、それらの事例に学び、地域での女性リーダーの発掘や育成に取り組んでいきたい。

〈誰にとっても安全・安心な避難所に〉

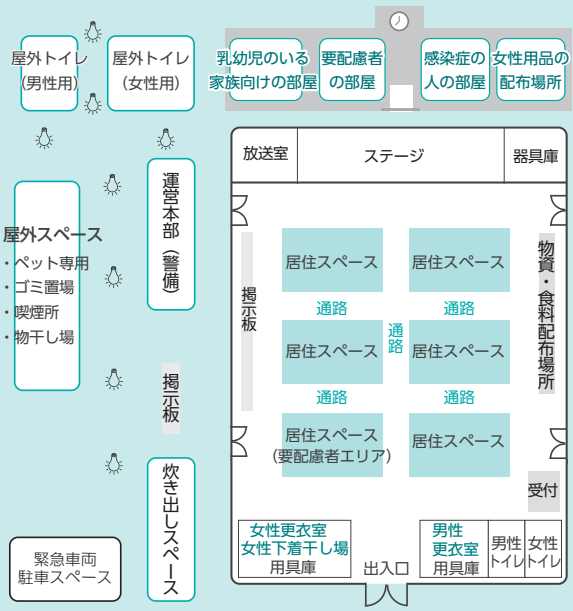
避難所として学校の校舎や公共施設を利用することが多いので、平常時から施設管理者とレイアウトなどについて検討しておきたい。上段にも図示したが、次のような個別のスペースが必要である。

先にも触れたように、居住スペースの間には通路を設けることが重要。横になる場所を床よりやや高めにすると、高齢者などは使いやすくなる。ダンボールベッドを利用したり、会議用机などの脚を畳んで代用したりしてもよい。また、トイレ周辺は明るくして、女性用を多く設置したい。

〈要援護者のニーズを聞く〉

多様な人たちが集まる避難所。困っていることや不足している物資などの要望は口にしづらいところだ。特に、女性や高齢者は我慢しがちなので、周囲が実際のニーズを掴むのは難しい。まずは、意見が言いやすい環境づくりから始めるとよいのではないか。

【学校避難所のレイアウト例】



【配慮が必要な項目】

- **女性** 女性専用の物干し場・物資を配布する女性担当者・防犯対策
- **妊産婦** 衣類・毛布・医療支援・間仕切り
- **乳幼児** 授乳室やオムツ替えの場所・親子で安心して過ごせる場所
- **高齢者** 要介護者・介助補助具・医療支援・介助者・間仕切り
- **認知症患者** 家族との同室・医療支援や家族への声がけ
- **障害者** 情報提供の工夫・個別スペース・車いすなどが使える環境